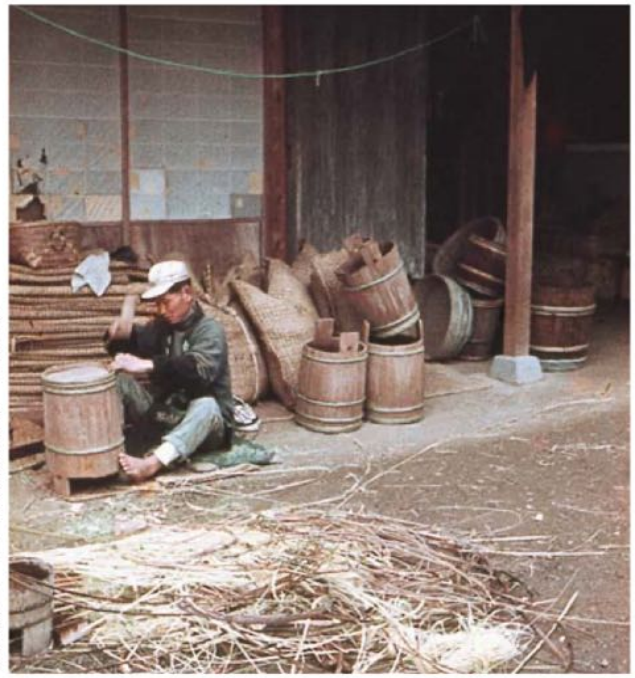
第7回

ていねいな暮らしのあったころ

佐野一彦の撮った伊深の里山



「桶屋」（昭和38年11月8日撮影）

「桶屋」

年に一度、桶屋が家々を回り、桶やたるを修理しました。桶は一年も使うとタガがゆるみ、使い勝手が悪くなりました。桶には、釣瓶や米を水につけておく「半ぎり」、漬物桶、ハンゾ（洗面用）、肥桶など、用途もさまざまなものが、普段の暮らしの中で使われていました。

桶屋は、タガにするために割った竹を丸くまとめたものと桶屋道具を天秤棒に担いで家々を回りました。桶屋が来る前日には、桶をきれいに洗っておき、桶屋は家の門先きの作業場で一日かかって修理しました。

伊深にくる桶屋は、関から来ていました。正眼寺おかかえの桶屋で、いつも寺の桶を直したあと、伊深や加治田を回り、桶を修理しました。

かつては下駄を直す職人や鍋や釜を修理するイカケ屋という職人がいました。生活に使う日用品は、修理しては使うことが当たり前でした。

「肥桶を荷う」（昭和41年3月15日撮影）